

昇曙夢の未刊の大著『人生と宗教』について

長谷部宗吉・松田 潤

1. 本稿の目的

明治末期から大正、昭和の第2次世界大戦前にロシア文学作品の翻訳、並びにロシア事情の紹介に活躍した昇曙夢（本名：昇直隆、1878-1958）がいる。彼に未刊の大著『人生と宗教』があることは、それほど知られていない。

確かに、『えうゐ』17号（響文社1989.4.10）に昇曙夢著「ニコライ大主教の生涯と業績」が収録されており、外川継男氏はその「解説・注」においてその元となった未刊の『人生と宗教』の詳細を紹介している。この残された昇の未刊の著作は、それまでに何らかの形で印刷刊行された部分と書き下ろしとで成り立っている。なお、外川氏の解説では生前発表された部分についての初出確定の作業はされていない。この『人生と宗教』の原稿は現在私どもの手元にある。これは外川継男氏が昇曙夢のご子息隆一氏（故人）から託されたものであり、私どもが一時的に、お借りしたものである。[以下敬称略]

内容は上記のように手書き原稿とこれまでに発表された印刷稿が一緒になっている¹。昇は生前、最後の作品としてこれまで発表したものに手を加えて一冊の作品としようと考えていたと、外川に子息隆一が語っている。

本稿は『人生と宗教』の内容、特に生前発表されたものについて、その初出などを可能な限り確定させることにある。これによって、今後の昇曙夢研究にとって必要な文献資料となればと考えるからであり、本稿が契機になって刊行する機会がもたらせられることを希求しているからでもある。

昇その人が、現在は忘れられたロシア文学者の一人であるということについて、長谷部が既に昇の「著作年譜（稿）I - IV」を編むにあ

たって「はじめに」で外川のことばを引きながら述べている〔長谷部、2008：39〕。

しかし、近年は昇曙夢について再評価が始まっているように見うけられる。これにはいくつかの理由が考えられる。まず昇自身にかかわることとしては、生誕130年・没後50年を記念したシンポジウムが2007年5月に出身地奄美で昇の評伝〔和田、2001〕をまとめた和田芳英を中心に開催された〔昇曙夢歿後50年を偲ぶシンポジウム実行委員会、2008〕。

また彼が信仰し、ロシア語を学ぶ切っ掛けとなったロシア正教を日本に布教した大主教であるニコライの日記が、中村健之介によって発見され公刊された²こともあるのであろう。さらにこの翻訳作業がロシア史・文学研究者たちによって進められるのと平行するように、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号09410124）（課題番号13410138）による来日ロシア人の歴史を掘り起こす作業が進められた。この中でロシア正教をふくめロシア革命後日本に住むことになるロシア人と日本人の交流が研究され、公刊される〔長縄・沢田、2001-2010〕。

また、大きな流れとしてみるなら、明治期における日本の近代化を考える基礎資料とでもいうべき欧米文学の翻訳作品を国立国会図書館所蔵資料からマイクロフィルム化するという事業〔国立国会図書館、1987-1995〕と、新聞雑誌掲載の翻訳作品の復刻出版〔川戸・榊原、1996-2001〕が重なる。さらに入手が困難となっている資料で国立国会図書館が所蔵しているもののデジタル公開化も進められている。このデジタル化されたものを通してでも、昇作品を容易に手にすることができるようになった。国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>)で「昇曙夢」を検索キーワードにして検索すると、明治36年（1903）正教青年会刊の『宗教と自然美』以下昭和22（1947）年刊『ゴーリキイの生涯と芸術』（社会書房）まで47点の作品が見つかり、原資料が一般に閲読可能となっている（2012年2月現在）。

こうした一連の流れの中で、幕末明治期に始まる日本とロシアの交流史を考える際にロシア文学の翻訳や文化の紹介を精力的に行った昇が再評価されることに繋がったとも考えられるだろう³。実際昇の手になる翻訳・作品集が2011年に全7巻で翻刻再刊された〔源・塚原、2011〕。昇の再評価と研究の機運が高まっている。

より大きな流れとしては、宗教、とくにロシア正教を否定してきたソビエト連邦が1991年に崩壊することによって、日本のソ連研究家の多くをも呪縛してきた思考の枠組み〔松田潤、1987：163〕から解放されたことをあげることができよう。そのように理解するならば、ロシア正教徒にしてロシア研究者であった昇の再評価に弾みがついたといえる。

戦前の日本におけるロシア文学・文化の紹介が、これまで語られていたように東京外語系と東京大学系という官学系と、私学系としては早稲田大学によることが多いとされている⁴〔松田潤、1978〕〔野崎、1982〕事実のほか、ニコライ堂ロシア正教系という流れのなかでロシア語の習得が促された事実〔日本ロシア文学会、2000：31-38〕も、今後は十分に考慮されることになるだろう。今回の私どもの作業もその中に位置づけられると幸いである。

2. 『人生と宗教』の意義と全容

ここで、『人生と宗教』の全容を私どもが明らかにしようということの意味をもう少し考えてみる。まず、この原稿を昇隆一から託された外川の前記「解説」〔昇、1989：117-120〕を少し長くなるが引用する。

(注) 下線及び〔 〕内は、今回、外川の解説に私どもが加えた部分である。

「昇曙夢の未刊の著作に『人生と宗教』と題する一篇がある。その表紙には曙夢自身の手で「原稿紙にして約四百五十枚」と書かれてあるので、それがどれほどの分量であるかは、容易に想像

がつく。

これは晩年の曙夢の最大の著作であるばかりでなく、彼の人生観や宗教観をうかがう上で不可欠な資料であるが、ついに刊行されずに終わったため、いままでほとんど人に知られず、埋もれたままになっていた。しかし、以下に見る「まえがき」にも述べられているように、これは全部が書きおろしではなく、その三分の二はなんらかの形で生前発表されたものであり、印刷に回さんばかりになっているこの作品は、論文の切り抜きと書きおろし原稿の二つの部分から成っている。そして新しく書き加えられた原稿中大きなものといえば、この「ニコライ大主教の生涯と業績」のほかに、「私の信仰告白」（本誌 [えうゐ] 第十五号に掲載）、「断片録」、「ヘブライズムとヘレニズム」がある。その中でも、「ニコライ大主教の生涯と業績」はとくに多くの頁を占める一篇であるが、なぜ曙夢がここで師ニコライについて詳細に記したかは、これも「まえがき」によって知ることができる。

曙夢が初めてニコライについて語ったのは、師が没して間もない明治四十五年二月二十五日付けの「大阪朝日新聞」においてであった。これは「故ニコライ師の一生」と題する一頁全部を占めるかなりの長文であるが、どういうわけかこれには署名がない。私がこれをもって曙夢の書いたものであると断ずる根拠は、この新聞の切り抜きに、彼がペンで署名しているからである。彼はこのほかにも、「私の信仰告白」や「研究と翻訳の五十年」の中で師のことを書いているが（拙稿「昇曙夢とロシアをめぐって（二）参照」[外川、1986]）、昭和二十九年六月一日発行の『ソ連研究』（第三巻第六号）にも「ニコライ大主教の思い出」と題する六頁ほどの一篇を寄稿している。そして曙夢 [は] この一文を以て「ニコライ大主教の生涯と業績」の冒頭とし、小見出しも「私の思い出」と改め、更に「私は本稿を書くに当たって、普通の行き方とは逆であるが、先ず私自身の思い出から始めることにしよう。」という言葉を付け加えている。本誌に発表するのはこ

の既発表の分を除いた、四百字詰め原稿用紙で三十九枚から成る全文である。

以上述べたように、『人生と宗教』の「まえがき」は「ニコライ大主教の生涯と業績」を理解する上でも、曙夢の思想を知る上でも重要な一文と思われるので、ここにその全文を引用しよう。

「昭和の中頃、約八年間、私は母教会日本正教会（俗にギリシャ正教会ともいう）の機関誌『正教時報』の主筆になっていたことがある。本書中に収めた論文や随筆の多くはこの時代に執筆したものであるが、更にその後書いた幾篇かの新しい原稿をも合わせて編集した。その際、これらの諸篇を大体的内容によって六題目の下にまとめておいたが、これは勿論厳密な分類でないから、中には題目と一致しないのがあるかも知れない。あらかじめことわっておく。

私の時報時代はちょうど私がトルストイに傾倒していた時代⁵であった。書中トルストイに関する論文や彼の思想、言説、物語等を引用した箇所が多いのはそれがためである。

本来人生問題と宗教問題の取り扱い方には二つの方法があると思う。一つは人生問題も宗教問題も純然たる思想問題として抽象的に考察することであり、もう一つは人生と宗教との交渉を、広く芸術、哲学、科学とも関連させながら、その道の先達たちの貴重な体験に基づき、またはその体験を通して具体的に解明することで、前者より遙かに万人向きであり、通俗的である。本書は勿論第二の方法を取ったもので、広く万人を対象とする。

実を言うと、本書はもっと早く発表したかったのであるが、原稿の整理をするいとまがなかったので遷延今日に至った。それだけに私にとっては長い間の待望の書であり、久しぶりに自分の古里に立ちかえったような一種の御愁さえ覚える。

目次をのぞいていただければわかる通り、書中の各篇は各種の問題や事象に触れているが、著者はそれを書くに当たって、一宗

一派の偏見に囚われないように注意しながら、どこまでも一つのクリスチャンとしての立場から、公平無私の態度をもって一切の問題に接したつもりである。

ただ第V部の教会と伝統中の諸篇は、主としてロシア伝来の日本正教会を直接の対象としてはいるが、これとてもある種の伝統的些事を除けば、どの宗派にとっても、どの教会にとっても共通の問題であり、広く一般宗教界にとっても適切な警告たるを失わないと思う。

書中「ニコライ大主教の生涯と業績」は他の諸篇に比して多少長いようであるが、これは師の渡日以来五十年の間わが精神文化の上に遺した業績が、邦人の間に広く知られていないばかりでなく、よく理解されていないので、この際できるだけ詳しく書いたからである。最後の数篇は私の思索と研究の成果ともいふべきものをまとめたものであるが、勿論その全部でなく、個別的な二、三の論文を取り上げたに過ぎない。ただその中で特に注意していただきたいのは「ヘブライ〔ズ〕ムとヘレニーズム」(「ヘブライ思潮とギリシャ思潮」)である。これは旧新約を通じて救贖の舞台におけるセミチック人とアリアン人との歴史的運命の交代と転換との意義を、民族性の上から考察したもので、世界史的意義を有する大事件の一つである。私の研究は単にその端緒ともいふべき本質的問題の一つに触れただけで、この種の宗教文化史的問題はキリスト教の中にもまだいろいろあって、永い間その解決を待ってやまないのである。だから、キリスト教の神学者や歴史家は単に教理の解釈や教会史の研究にのみ没頭することなく、これらの本質的問題の世界史的意義をも大いに解明していただきたいと思う。』

3. 『人生と宗教』の構成の詳細

長い引用となったが、外川はこのあとに『人生と宗教』の原稿に基

づいて目次構成などを紹介している。次にその部分を章だてにしたがって詳しく検討し、長谷部調査の「著作年譜（稿）」と比較する。

各章のタイトル、収録論文のタイトルで太字の部分は外川によって紹介されているものである。[一]、①などの数字は便宜上私どもが付け加えた。章タイトルの下にある既出データは昇自身が記載したものと、私どもの調査によるものである。

とくにここで問題としているのは、新稿部分の確定である。

『人生と宗教』[の目次構成]

注意事項（注・まえがきと目次の前に昇自身の手書きによる以下の記載がある*）

- 一、新カナに改むること
- 二、当用漢字に改むること
- 三、その他ある種の漢字をカナに直すこと
- 四、出版が決定すればもう一應文章を見直したいと思います

著者

*ここに書かれた昇の注意事項にあるように、新カナや当用漢字に改める作業を行い、文章の見直しをする過程で印刷原稿ではなく、新たに書き下ろされたように見うけられる手書き原稿がある。これら手書きで書き下ろされたものの既出、初出の異同を確定しようとしたのがこの稿の目的であり、意義であると考える。

まえがき**

**これは前掲の外川の「解説」[昇、1989]に全文が紹介されている。

目次

I 人間生活の指標

[一] 道は近きにあり

「道は近きに在り」昇直隆著 正教時報 24巻10号, 1-2
(1935.10.1)

[二] 人は何によって生きるか

「三つの眞理」昇直隆著 正教時報 26 卷 8 号, 2-4
(1937.8.1) を改題、収録。

[三] 三つの死

「生と死」昇直隆著 正教時報 27 卷 12 号, 1-2 (1938.12.1)
を改題、収録。

[四] 人生をより善く

「人生をヨリ善くするために」昇直隆著 正教時報 22 卷
11 号, 1-2 (1933.11.1) を改題、収録。

[五] 「人の子」とは何であるか

「「人の子」とは何ぞや」昇直隆著 正教時報 23 卷 10 号,
1-3 (1934.10.1) を改題、後半を削除して収録。

[六] 生き甲斐ある生活

出所不明。

[七] 永世への希望 (原稿では「永生への希望」)

「來世觀と道德」昇直隆著 正教時報 27 卷 11 号, 1-3
(1938.11.1) を改題、収録。

II 体験と実践

[一] トルストイ主義の基調

「トルストイ主義の基調」昇直隆著 正教時報 25 卷 11
号, 1-3 (1936.11.1) を一部変更。

[二] トルストイの体験

「トルストイの體驗」昇直隆著 正教時報 24 卷 11 号, 1-5
(1935.11.1) を一部変更。

[三] 晩年のトルストイ

『トルストイ研究』(東京 壯文社 1948.10.10 6, 256p
21cm) 所収の「晩年のトルストイ」(pp.49-58) を一部変更
し収録。

[四] 宗教的探究の悲劇

「宗教的探究の悲劇」昇直隆著 正教時報 25 卷 6 号, 1-2
(1936.6.1)

[五] ドストエフスキイの宗教的苦悶

「神人と人神の思想」昇直隆著 正教時報 24 卷 9 号, 1-6
(1935.9.1) を改題、収録。

[六] トルストイに影響した二人

「年頭所感」昇直隆著 正教時報 24 卷 1 号, 1-4 (1935.1.1)
を改題。

[七] ソロヴィヨフの世界観

「ソロヴィヨフの靈的進化論」昇直隆著 正教時報 28 卷
12 号, 2-7 (1939.12.1) を改題、一部変更し収録。

なお同様のものとして次のものがある。

「ソロヴィヨフの神人的世界観 (上) (最新思潮講話 14)」
新潮 25 卷 3 号, 84-90 (1916.9.1)

「ソロヴィヨフの神人的世界観 (下) (最新思潮講話 15)」
新潮 25 卷 5 号, 88-92 (1916.11.1)

[八] 内村鑑三先生の思い出

「内村先生の思い出」内村鑑三著作集月報 10, 1-3 (1954.1)
を改題。

[九] ニコライ大主教の生涯と業績

「ニコライ大主教の生涯と業績」えうゐ 17 号, 103-117
(1989.4.10)

[解説・注] (外川継男著 pp.117-126)

冒頭部分は「ニコライ大主教の思い出」(ソ連研究 3 卷 6
号, 36-41 1954.6.1) を改題し「一、私の思い出」とした。
それ以下の書き下ろしの自筆原稿「二、日本傳道の動機と
露都出発」～「九、師の風格」を外川が『えうゐ』(17 号)
に翻刻している。

Ⅲ 宗教と芸術と祭礼

[一] 宗教的藝術

「宗教藝術に就いて」昇直隆著 正教時報 24 卷 2 号, 1-3 (1935.2.1) を改題、冒頭を新たに書き下ろしている。

[二] 藝術史上のマドンナ

「藝術に於ける聖母禮讚」昇直隆著 正教時報 28 卷 1 号, 3-5 (1939.1.1) を改題。

[三] クリスト教と古典的祭礼

「古典的祭禮」昇直隆著 正教時報 28 卷 4 号, 3-5 (1939.4.1) を改題、冒頭を追加変更。

[四] 上田敏氏と礼拝式

「正教會奉神禮の特徴」昇直隆著 正教時報 23 卷 5 号, 1-4 (1934.5.1) を改題、末尾部分を変更。

[五] クリストの降誕と復活の意義

「復活の希望」(正教時報か? 出典不明) に冒頭を大幅に書き加え改題。

[六] 西欧諸民族のクリスマス伝説

「諸民族のクリスマス傳説」旅と傳説 7 年 1 号 (71 号), 22-26 (1934.1.1) 及び正教時報 24 卷 1 号, 8-11 (1935.1.1) の改題。

[七] 夜と人生

「夜半と人生」昇直隆著 正教時報 26 卷 5 号, 1-3 (1937.5.1) を改題。

Ⅳ 靈肉一致の宗教

[一] 宗教の機能

「宗教の機能」昇直隆著 正教時報 23 卷 9 号, 1-3 (1934.9.1)、一部変更。

[二] 宗教礼賛

「宗教禮讚」昇直隆著 正教時報 24 卷 8 号, 1-2 (1935.8.1)、

一部変更。

[三] 科学と人生

「科学と人生」昇直隆著 正教時報 27 卷 10 号, 1-2
(1938.10.1)、一部変更。

[四] 霊肉一致の宗教

「霊肉一致の宗教」昇直隆著 正教時報 23 卷 8 号, 1-4
(1934.8.1)、一部変更。

[五] 血と肉との神秘

「肉と血との神秘」昇直隆著 正教時報 25 卷 3 号, 1-2
(1936.3.1) を改題、一部変更。

[六] 偉大なる二つの誕生

「偉大なる二つの誕生」昇直隆著 正教時報 25 卷 1 号,
1-3 (1936.1.1)

V 宗教と伝統 (原稿では「教會と傳統」)

[一] クリスト教徒の社会的理想

「基督教徒の社会的理想」昇直隆著 正教時報 24 卷 6 号,
1-3, 12 (1935.6.1)

[二] 地上天国の建設

新しい原稿に出典不明の原稿が途中に入っている。

[三] 傳統的教會の改革

「日本正教會の獨立と改革」昇直隆著 正教時報 30 卷 9
号, 1-7 (1940.9.1) を改題、前半を大幅に変更。

[四] ソ連における宗教対策の変遷

「ソ連の宗教と宗教政策 (盟邦評論)」(出典不明) の改題、
一部変更。

[五] 私の信仰告白

新しい原稿、外川継男が次の通り翻刻している。

「私の信仰告白」 えうみ 15 号, 91-95 (1986.12.25)

[解説] (外川継男著 pp.95-96)

なお、この号には、昇藤子（昭和 28 年 5 月）著「思ひ出
附・曙夢臨終の記」（pp.97-122）

〔解説〕（外川継男著 pp.122-123）も併録。

〔六〕断片録

自筆の原稿であるが、既発表のもの相当数が含まれる。

①「読書の秋」は下記を一部変更したもの。

「湘南その折々」正教時報 22 卷 9 号, 24-27 (1933.9.20)

内容：一、読書の秋 二、神に就ての一考察 三、反宗教運動者に
四、労働奉仕の生活 五、精神的の深み

②「聖書のすすめ」

③「昔の学生と今の学生」

「昔の學生今の學生」昇曙夢著 科學ペン 6 卷 10 号,
110-111 (1941.10.1) を一部（特に末尾）変更したもの。

④「労働奉仕の生活」

①と同様に 正教時報 22 卷 9 号, 26 (1933.9.20) を一
部変更したもの。

⑤「ゴーゴリの笑い」

⑥「反宗教運動について」

①と同様に 正教時報 22 卷 9 号, 25-26 (1933.9.20) を一
部変更したもの。

⑦「ソロヴィヨフと日本」

⑧「アリオーシャのモデル」

⑨「トルストイの『日記』について」

「トルストイの「日記」を読む（湘南その折々）」

正教時報 26 卷 12 号, 12-14 (1937.12.1) を改題、一部
変更したもの。

⑩「トルストイ語録」下記を一部変更したもの。

「人生訓」昇直隆訳 正教時報 23 卷 6 号, 1-3
(1934.6.1)

内容：一、トルストイ語録 二、ゴーリキイ語録

⑩「ゴリキイ語録」下記を一部変更したもの。

「人生訓」昇直隆訳 正教時報 23巻6号, 1-3
(1934.6.1)

内容：一、トルストイ語録 二、ゴリキイ語録

VI 思索と研究

[一] ヘブライズムとヘレニズム

新規の原稿と思われていたが（前記外川の記述）、ほぼ同内容のものが下記の『ニコライ大主教宣教五十年記念集』に収録されている。これは今回の私どもの調査で新たに判明したことである。

「基督教の歴史的意義」（瀬沼恪三郎編『ニコライ大主教宣教五十年記念集 1861-1911』東京 正教神學校 1911.7.16 所収 pp.100-119）

（注）この末尾には（本論を草するに當り、露國評論界の名家ローザノフ氏の筆に成れる『歴史上に於ける基督教の地位』に負ふ所少からず、仍て茲に辭り置く）とあり。

[二] クリト教と人道主義

「正教と新人道主義」昇直隆著 正教時報 23巻3号, 1-5
(1934.3.1) を改題、一部変更。

[三] 個人的生命と普遍的生命

「普遍的生命」昇直隆著 正教時報 27巻5号, 3-6
(1938.5.1) を改題、一部変更。

[四] ヘブライ文学研究序説

「希伯來文學研究序説（一）」正教時報 27巻10号, 15-17
(1938.10.1)

内容：一 はしがき、二 舊約詩書の分類、三 希伯來詩の特質、四 希伯來詩の形式

「希伯來文學研究序説（二）」正教時報 27巻11号, 14-18
(1938.11.1)

内容：五 希伯來詩の並行體、六 並行體の定義と識別法、
七 對句の種類

「希伯來文學研究序説（三）」正教時報 27 卷 12 号、8-11
(1938.12.1)

内容：八 對句の複雑化、九 詩形の多様性、十 對句研
究の利益、十一 預言的文體

以上を要約すると、全体の手書き原稿と印刷原稿に昇自身が振った
と思われるノンブル 186 ページの内、新稿と推定されるのは外川が翻
刻した部分をのぞくと 57 ページであると思われる。

注

- 1 復刻版の「著作編 2」の解題にも「曙夢の多数に及ぶ著作を比較した
場合、章ごとの規模で一度発表したものを再録し、それを組み合わせ
るかたちをとっている例が多い」とされている。[源・塚原、2011、
「著作編 2」：1]
- 2 中村健之介によってニコライ主教の日記が 1979 年に発見され、ロシア
語の一部が 1994 年に北大図書刊行会から、また抄訳が 2000 年に同刊
行会から出版された。日記手稿の全容はロシア語でロシア国内におい
て 2004 年に刊行された。日本語全訳版は 2007 年に教文館から全 9 卷
で出版された。2011 年には 3 卷で、その抄訳が岩波文庫でも刊行され
ている。
- 3 昇の没後 50 年を記念するシンポジウムが彼の出身地奄美で 2007 年に
開催された。昇の日本へのロシア文学・文化の紹介の意義を、ロシア
研究の側から沼野充義、中本信幸、加藤百合がパネリストとして論じ
たものが [昇曙夢没後 50 年シンポジウム実行委員会、2008] として公
刊されている。
- 4 ロシア革命後は日本においても社会主義革命をめざす者たちにとつ
てはロシア語の修得は重要な動機となっていた。しかし、治安維持法下
での学習機会にはひじょうに限られたものであったことも確かである
[松田道雄、1980：75]。

一方で、東京商科大学や小樽高商など商業系の教育機関で商用に必
要とされる語学教育の中でもロシア語が教えられていた。また、日本

の大陸進出と結びついて考えられるロシア語に特化した哈爾濱学院（日露協会学校）がある。しかし、日露協会学校の校名変更の際に校長私案として「ハルビン高等商業」というのがあった〔内村、2008a：55-58〕ことから考えるなら、哈爾濱学院が高商系のビジネス実務という流れと同様の位置づけも可能であろう。

なお、高杉一郎よれば、ソ連では日本の軍学校では対ソ用にロシア語を教えているという誤解と偏見があったという〔高杉、1991：46〕。内村剛介がシベリア抑留で最後まで釈放されなかったのも、哈爾濱学院の卒業生でロシア語が堪能だったということにも通じるだろう〔内村、2008b：91-92〕。その一方、内村は同じ抑留者であった石原吉郎（東京外国語学校ドイツ部貿易科を卒業、招集された後、北方情報要員第1期生として大阪露語教育隊、さらに東京高等教育隊でロシア語を学んだ〔石原、1980：510〕）については辛辣な評を『失語と断念』で書いていた〔沼野、2010：589〕。

また、満鉄調査部は戦前の日本のソ連研究における拠点の一つと考えられていたが、実際の逮捕者のリストには哈爾濱学院中退と卒業者が各1名と、ロシアを専門に学んだであろう学校のメンバーが中心であったとはいえない〔小林、福井、2004：28-29〕〔小林、2006：82〕。

陸軍幼年学校、士官学校、陸軍大学のロシア語は昇も一時教えていた。これらの学校ではニコライの正教神学校出身者がもっぱら教えていたという〔日本ロシア文学会、2000：190〕。このことは、大学などでロシア語を学習した者たちに対して社会主義的傾向を恐れていたという事の反映といえるかもしれない。また、ソビエト社会主義共和国連邦が出自となってしまった日本正教会が日本帝国のなかで生き延びることを考えるならば、昇らが軍学校でのロシア語教育への協力を行ったことにも十分な理由があったといえよう。

いずれにしろ、帝国日本が朝鮮半島を植民地とし、そのためにロシア帝国、さらにソビエト連邦と満州を舞台に衝突を繰り返す中では、ロシア語を文学への憧れ、あるいは社会主義への希望として学ぼうとしても、天皇とスターリン元帥によってともに犯罪者として裁かれる宿命にあったということだろう。内村は「日本人は、ロシア語にかかわるからには軍のメシを食わざるをえないのかもしれない。米川正夫が陸軍大学の教官で神西清が東亜研究所の職員だという例も目の前にあるではないか。〔内村、2008：47〕という。関東軍の軍属として通訳を務めた内村も、兵士として召集されて関東軍の情報員として働いた石原や、たまたまエスベラントを学んでおり、横浜事件で解散させ

られた改造社社員であった高杉（東京文理大英文科卒）も、一兵士としてそれぞれにロシア語が使えたために、スターリンの獄で長く過ごすことになったといえる。

- 5 明治中期から大正期にかけて日本のトルストイ熱は雑誌『トルストイ研究』が出版されるほどであった。とくに昇はこの雑誌でもロシア文学の専門家として多くの部分を書いている〔柳、1998：100-101〕。『トルストイ研究』復刻版（1985 大空社）別冊の著者名索引によると日本人名では昇は最多の18点を翻訳・執筆している。

引用・参考文献

- Berton, P., Langer, P. F. and Swearingen, R. (1956) *Japanese Training and Research in the Russian Field*, University of Southern California Press
- 長谷部宗吉（2008）「昇曙夢著作年譜（稿）（Ⅰ）」『札幌大学女子短期大学部紀要』（51）
- （2009）「昇曙夢著作年譜（稿）（Ⅱ）」『札幌大学女子短期大学部紀要』（52）
- （2010）「昇曙夢著作年譜（稿）（Ⅲ）」『札幌大学女子短期大学部紀要』（53）
- （2011）「昇曙夢著作年譜（稿）（Ⅳ）」『札幌大学女子短期大学部紀要』（54）
- 石原吉郎（1980）『石原吉郎全集Ⅲ』花神社
- （2006）『石原吉郎詩文集』（講談社文芸文庫）講談社
- 加藤百合（2007）「明治期露西亞文学翻訳論攷（6）：森鷗外・昇曙夢（「重訳」と「風土」）」『筑波大学大学院人文社会科学研究所科芸・言語専攻』（52）
- 川端香男里（1997）「ロシア文学と日本」『トルストイ集Ⅰ』（明治翻訳文学全集：新聞雑誌編：38）大空社
- 川戸道昭・榎原貴教編（1996-2001）『明治翻訳文学全集：新聞雑誌編〔復刻版〕』大空社
- 小林英夫・福井紳一（2004）『満鉄調査部事件の真相：新発見資料が語る「知の集団」の見果てぬ夢』小学館
- （2006）『満鉄調査部の軌跡：1907-1945』藤原書店
- 国立国会図書館（1987-1995）『明治期翻訳文学書全集：国立国会図書館所蔵』ナダ書房〔マイクロフィルム〕

- 松田潤 (1978) 「わが国におけるソ連・東欧研究の歴史と現状」『スラヴ研究』(22)
- (1987) 「日本におけるソ連・東欧史研究の現状：計量書誌学的分析(1976-1980)」『スラヴ研究』(34)
- (2000) 「札幌大学図書館松田道雄氏旧蔵ロシア史関係コレクションについて」『札幌大学女子短期大学部紀要』(36)
- 松田道雄 (1980) 「私にとってのロシア語」『革命のなかの人間』(松田道雄の本；8) 筑摩書房
- 源貴志 (2002) 「〈書評と紹介〉和田芳英著『露西亜文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』」『比較文学年誌』(38) (『昇曙夢翻訳・著作選集』著作編2に再録)
- 塚原孝編・解説 (2011) 『昇曙夢翻訳・著作選集』クレス出版 (翻訳編1-3；著作編1-4) [復刻版]
- 南平かおり (2011) 「昇曙夢と日本児童文学：日本児童文学界におけるソログープ作品の紹介の歴史を辿って」『昇曙夢翻訳・著作選集』翻訳編2
- 初内裕子 (2011) 「昇曙夢の初期翻訳」『昇曙夢翻訳・著作選集』翻訳編3 クレス出版
- 長縄光男 (1989) 『ニコライ堂の人びと：日本近代史のなかのロシア正教会』現代企画室
- (2007) 『ニコライ堂遺聞』成文社
- (2011) 『ニコライ堂小史：ロシア正教受容150年をたどる』(ユーラシア・ブックレット) 東洋書店
- 沢田和彦編 (2001-2010) 『異郷に生きる』1-5 成文社 (科学研究費補助金報告書版として『ロシアと日本：共同研究』[第1集は『日本とロシア』] 1-8 (1987-2010) がある。)
- 中村健之介 (1996) 『宣教師ニコライと明治日本』(岩波新書)
- 中村悦子 (2003) 『ニコライ堂の女性たち』教文館
- (2011) 『宣教師ニコライとその時代』(講談社現代新書)
- 日本ロシア文学会編 (2000) 『日本人とロシア語：ロシア語教育の歴史』ナウカ
- ニコライ／中村健之介訳編 (1993) 『明治の日本ハリストス正教会：ニコライの報告書』教文館
- ／——ほか編 (1994) 『宣教師ニコライの日記(ロシア語)』北海道大学図書刊行会
- ／——ほか編・訳 (2000) 『宣教師ニコライの日記抄』北海道大学図書刊行会

- ／—— 訳・解説・注解 (2007)『宣教師ニコライの全日記』1-9
教文館
- ／—— 訳 (2011)『ニコライの日記：ロシア人宣教師が生きた明治
日本』上中下 (岩波文庫)
- 日ソ関係図書総覧刊行委員会編 (1968)『日ソ関係図書総覧：1917-1967』岩
崎学術出版社
- 昇曙夢 (1986)「私の信仰告白」『えうゐ』(15)
- (1989)「ニコライ大主教の生涯と業績」『えうゐ』(17)
- 昇曙夢没後50年を偲ぶシンポジウム実行委員会編 (2008)『2007年昇曙夢
没後50年を偲ぶシンポジウム：「昇曙夢の生涯と業績を語る」記念誌』
同実行委員会
- 野崎韶夫ほか (1982)『露西亜学事始』日本エディタースクール
- 沼野充義 (2011)「解説＝内村剛介を読む：ロシア文学者としての内村剛
介」『内村剛介著作集』第5巻 恵雅堂出版
- 奥村剌三・左近毅編 (1998)『ロシア近代と近代日本』(Sekai shiso seminar)
世界思想社
- ポズネーエフ／中村健之介訳 (1986)『明治日本とニコライ大主教』(もん
じゅ選書) 講談社
- 榊原貴教編 (1988)『明治期翻訳文学書全集目録』1-3 ナダ書房
- 高橋保行 (1996)『迫害下のロシア教会：無神論国家における正教の70年』
教文館
- (1998)『知られていなかったキリスト教：正教の歴史と信仰』教文
館
- 高杉一郎 (1991)『極光のかけに：シベリア俘虜記』(岩波文庫) 岩波書店
[1950年刊の目黒書店版の文庫化]
- (2008)『私のスターリン体験』(岩波現代文庫) 岩波書店
- 田代俊一郎 (2009)『原郷の奄美：ロシア文学者昇曙夢とその時代』書誌侃
侃房
- 外川継男 (1985)「昇曙夢とロシアをめぐって (一)」『えうゐ』(14)
- (1986)「昇曙夢とロシアをめぐって (二)」『えうゐ』(16)
- トルストイ会 (1985)『トルストイ研究』大空社 [1916-1919 新潮社刊の
復刻]
- 内村剛介 (1979)『失語と断念：石原吉郎論』思潮社
- (2008)「幻のハルビン 2」『内村剛介著作集』第1巻 恵雅堂出版
- (2008a)「思想としてのハ爾濱学院」『内村剛介著作集』第1巻 恵
雅堂出版

- ・陶山幾朗編（2008b）『内村剛介ロング・インタビュー：生き急ぎ、
感じせく：私の二十世紀』 恵雅堂出版
- 和田芳英（2001）『ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』 和泉書院
- 山本武利ほか編（2006）『岩波講座「帝国」日本の学知』 1-8 岩波書店
- 柳富子（1998）『トルストイと日本』 早稲田大学出版部
- 編著（2001）『ロシア文化の森へ：比較文化の総合研究』 1-2 ナタ
出版センター